

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19401031

研究課題名（和文） 北アジアにおける後期旧石器時代成立過程の研究

研究課題名（英文） A study of the Upper Palaeolithic Formational Process in North Asia

研究代表者

鶴丸 俊明（TSURUMARU TOSHIAKI）

札幌学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：50188645

研究代表者の専門分野：考古学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学・旧石器時代・北アジア・モンゴル

## 1. 研究計画の概要

本研究計画では、モンゴルの中期・後期旧石器時代遺跡の発掘調査を通してその地域の後期旧石器時代成立に関わる資料の蓄積を第一段階とし、次いでその成果をロシア・アルタイ地方の成果と合わせて北アジア全体を俯瞰することを第二段階としている。最終的にはその成果を日本列島における当該期の調査・研究・議論に利用しようとするものである。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 前半の2年間は、より日本列島に近いモンゴル東部で遺跡分布調査を実施し217遺跡を確認し（洞窟遺跡1を含む）、そのうちの2遺跡の試掘調査も実施したが、旧石器時代包含層の良好な状態を把握することはできず、むしろ遺跡形成後の自然営力による地形的変形作用が広い地域を覆っていることを知った。

(2) 上記の理由でモンゴル東部では層位的知見に恵まれた遺跡を得ることが難しいことから、3年目には調査地域をモンゴル中部のセレンゲ河流域に移して、あらためて分布調査を実施し後期旧石器時代遺跡を9か所把握した。同時に、当地域ではすでにフランス、アメリカ、ロシアの各調査隊が旧石器時代遺跡の発掘調査を実施して後期旧石器前半期の包含層をそれぞれ確認していることから、その部分の観察調査を実施した。また、その中の一つであるイエール大学が発掘して報告書の公表のないまま10年を経ている「バヤン遺跡」をモンゴル科学アカデミー考古学研究所とともに試掘調査し、当該期の文化層がさらに広く遺存していることと同

時に、その中に明らかにルバロワ技法による複数の遺物を確認することができた。また同時に、フランス隊が発掘した「ドロルジI遺跡」のほぼ同じと考えられる文化層では約29000年前のC14年代が得られており、同様にルバロワ技法の関連遺物や、ダチョウの卵の殻を用いたビーズや大型哺乳類、げっ歯類の骨などが出土していることを確認した。

## 3. 現在までの達成度

当初の予定では、初年度にかつてモンゴル・ロシアが発掘した東部の「アラシャン・ハダ遺跡」の再発掘を実施して層序を確認して、その周辺の発掘を継続する予定であった。しかし、その再発掘によって崩落・堆積した巨大な砂岩の量が夥しいことから、我々が現在知りうるかつての発掘調査の成果以上を得ることは難しいと判断し、より明確な成果を望める「層位的知見」に恵まれた遺跡を探してきたところである。したがって、3年目にして、ようやくその可能性の高い遺跡にたどり着いたのであり、本来の計画より丸2年、遅れていることになる。数値的な達成度は35%と表示せざるをえない。

## 4. 今後の研究の推進方策

残り1年の研究期間ではあるが、現在「バヤン遺跡」の発掘調査を視野に入れて、プライオリティーを持つイエール大学に当方の発掘への理解を求めている段階である。モンゴル科学アカデミー考古学研究所も調査の再開を望み、われわれの計画に賛同していることから、アカデミーとの共催で発掘調査する方向で準備中である。

また、前半2年間の成果は、7月までに報告書を刊行する予定ですでに実測図の作成

を終了している。

5. 代表的な研究成果

〔学会発表〕(計1件)

- ① 「モンゴル国ヘンティール県ベレフ I 遺跡の発掘調査」第 10 回北アジア調査研究報告会 2009 年 2 月 北アジア調査研究報告会実行委員会

〔その他〕(計2件)

- ① 「エギン川・セレンゲ川の旧石器時代」資料集「草原の古代文化—モンゴル高原の考古学—」札幌学院大学総合研究所・モンゴル科学アカデミー考古学研究所研究協定締結記念国際シンポジウム  
2009 年 12 月 23 日
- ② 「エグ川・セレンゲ河の旧石器時代」BOOKLET No.2 札幌学院大学総合研究所 2010 年 3 月 31 日